70年のあゆみ

1947(昭和22)年6月10日、関西大学在学生の父母・保護者が集まり、終戦直後の荒廃した学園の再建を支援しようという情熱から、教育後援会は誕生した。

教育後援会の誕生

学園の再建を支援

1947(昭和22)年6月10日、関西大学在学生の父母・保護者が集まり、終戦直後の荒廃した学園の再建を支援しようという情熱から、学部教育後援会は誕生した。大学では授業が再開されたとはいえ、まだ戦後間もない混とんとした時期で、教科書や教材ひとつにしても乏しかった。毎日の食料にも困窮する生活苦の状態ではあったが、新しい時代の学問や生き方を求めて、誰もがひたむきで一所懸命であった。そのなかで、我が子が学ぶ大学の復興のために、父母・保護者のもてる力を結集しようという気概のうえに、法人と大学からの積極的な理解と協力を得て、大学と家庭が協働して学生の自己形成を支援する体制ができあがった。

このときに採択された会則は、時代の変化に対応して部分的に修正されてきたが、基本的な活動方針や運営方法は現在まで受け継がれている。

同年6月21日の委員総会では、会長、副会長が選ばれ、同時に幹事、常任委員、委員、顧問などの役員も決められた。続いて6月27日に開かれた第1回役員会では、入会の申込み、会費の納入などに関する細則が決定された。この学部教育後援会と相前後して、予科、専門部一部、専門部二部にも教育後援会が誕生し、それぞれ会長、副会長の役員が選出された。

教育後援会組織の一元化

1948(昭和23)年には新制大学に移行したため、学部や予科、専門部といった区別がなくなり、4月15日に開かれた連合教育後援会委員会を機に、各教育後援会の組織を一元化することとなり、会長、副会長が選出され、新しい教育後援会が発足した。そして、4月18日に第1回委員会が開かれ、総務部、事業部、経理部といった職制の設置も決められ、それぞれに常任委員を配する陣容が整えられた。

会は当初、役員や委員を中心とした会員有志によって運営がなされ、図書の購入に対する援助など、在学生の教育・厚生に関して必要な事業および教職員の福利・研究などに対する援助に力点がおかれた。

学生であふれる阪急「大学前駅」(1948年)

同年5月の常任委員会では、千里山グラウンドの固定ベンチ、各教室のマイク設備、天六学舎のベンチや教室のマイク設備、夜間照明装置の寄付を決定し、また当時の「大学前駅」の拡張と駅舎の改修を阪急電鉄当局と交渉することなども決められた。

1949(昭和24)年11月には木造2階建ての「体育会館」を、1952(昭和27)年11月には「体育実技場」を建設して大学に寄贈した。また、戦後の住宅難は学生にも及んでいたため、1953～1956(昭和28～31)年度の4年間にわたって学生寮「秀麗寮」の建設費用の一部を毎年寄付、秀麗寮建設の原動力となった。

このように大学だけではまかないきれない施設や設備を次々と寄贈し、戦後間もなくの荒廃した学園環境の整備に大いに貢献した。

その後も教育後援会では周年事業や折々の必要に応じ、大学に対して施設や設備の寄贈・募金を行っている。(参照P.16-21)

独自の事業展開へ

キャンパスで開く「父母・保護者の一日大学」

教育後援会総会・学部別教育懇談会は、毎年5月の第3日曜日を中心に千里山キャンパスで開催している。関西大学へ子どもを入学させながら、大学について知る機会がほとんどなかった父母・保護者にとって、「一日大学」ともいえる総会・懇談会は意義深く、全国各地から多くの参加がみられる。

1947(昭和22)年に設立された教育後援会は、最初の総会を経商学舎の教授室で開催した。1962(昭和37)年3月に特別講堂(誠之館四号館)が完成したのを機に同講堂に会場を変更し、1963(昭和38)年からは、全父母・保護者に開催案内を送って総会を開くようにしたため出席者が急増した。1968(昭和43)年には会場を体育館に移し、1994(平成6)年、第二体育館完成にともなって会場を同体育館に変更、現在に至っている。なお、第二体育館は2002(平成14)年に千里山中央体育館と改称された。

また、1966(昭和41)年以降は、大学との共催で午後から学部別教育懇談会を行うようになった。午前の部の総会終了後、父母・保護者はキャンパス内の各学舎に移動し、昼食後、懇談会が始まる。懇談会には、学部長はじめ教員・職員が出席して、教育方針や大学生活の諸問題について説明。父母・保護者との質疑応答の後、個人面談へと場を移すが、膝をまじえて子どもの大学での日々や卒業までのサポート体制などについて語り合うことから高い評価を得、会場は毎年盛況である。

全国各地から多数の父母・保護者が一堂に会して開催する総会(1991年)

プラカードの先導で学部別教育懇談会場へ移動

なお、2009(平成21)年は、教育懇談会史上初めてのハプニングが起きた。世界各地で猛威を振るっていたインフルエンザが国内にも及び、学内にも感染の恐れがあったため、午前の部の総会のみ時間を短縮して開催、教育懇談会は後日学年別に個人面談形式で行われることとなった。

全国主要都市で地方教育懇談会

教育後援会では遠隔地在住の父母・保護者のために、1965(昭和40)年、高松、岡山、福岡の3都市で初めて地方教育懇談会を開催した。

1967(昭和42)年からは大学との共催になった。父母・保護者の期待と大学とが一体となって生まれたこの地方教育懇談会は、それまでの大学には見られなかった大学と父母・保護者との対話の成果を具体的に示すこととなった。

地方教育懇談会は、千里山キャンパスで行われている「父母・保護者の一日大学」である学部別教育懇談会と同じ趣旨のもので、関西大学の教育方針や就職活動状況の説明などが行われ、個人面談も実施。個人面談では授業への出席状況や健康診断の結果、学業成績などについて父母・保護者に伝えている。また、就職が内定した学生による「就職活動体験報告」も行い、父母・保護者にとって貴重な場となっている。

地方教育懇談会は父母・保護者の交流の場としても機能しており、情報交換の場としての価値も高い。親元を離れての学生生活や、仕送り、就職と、父母・保護者の不安は尽きない。思いを共有して話し合えるのも大きなポイントである。

この地方教育懇談会は年々内容が充実し、開催都市も拡大、大学と家庭との血の通ったコミュニケーションの場として父母・保護者に喜ばれている。

初めて開催された高松市での地方教育懇談会（1965年）

父母・保護者を対象に就職説明懇談会

就職説明懇談会は、4年次生の父母・保護者を対象として1980（昭和55）年に初めて開催された。

第1回目は、千里山学舎で開かれた。全国各地から1,800人余りの出席通知があったため、会場を文化系と工学部の2カ所に分けて開催した。

学科別就職説明懇談会場へ移動のため待機する
工学部3年次生の父母・保護者（1989年）

父母・保護者の関心は高く、いずれの会場でも活発な質疑応答が展開された。他に例を見ない催しであったため各界の注目を集め、当日の模様は新聞やテレビなどで大きく報じられた。

翌年からは就職時期などを考慮して3年次生の父母・保護者を対象に行うようになり、1995（平成7）年からは2年次生、2005（平成17）年からは1年次生にまで対象を広げ、総会・学部別教育懇談会、地方教育懇談会と並ぶ重要な行事として現在に至っている。

また、2001（平成13）年10月の就職説明懇談会では、財界人による特別講演会も実施。以後、2007（平成19）年12月まで計6回開催した。

大学と家庭を結ぶ会報『葦』

1958（昭和33）年12月15日、「関大教育後援会報」が創刊された。家庭と大学との連絡やコミュニケーションを緊密にするために発刊されたタブロイド判8ページの新聞は、創立10周年を経た教育後援会の新たな事業であった。編集に関しては森本靖一郎幹事を中心に、各学部から選出の会報編集顧問の先生方とともに、その任にあたった。1963（昭和38）年秋発行の第9号からは、体裁をA5判32ページの冊子『会報』に改め、表紙を「スクールカラーの紫紺地に白抜きの校章」のデザインにした。発行回数も1966（昭和41）年から年3回となり、編集内容に工夫をかさね、総ページ数も次第に増えていった。また、1968（昭和43）年から続いた大学紛争の際には、その経過の詳細などについてまとめた紛争特集『会報 特別号』を発行、1970（昭和45）年8月には、これまでの緊急報を再編集した特別号『今日の大学問題を考える』も発行した。当時の地方教育懇談会では、これらの特別号に基づき、父母・保護者と教職員との間で的確な質疑応答がなされるようになり、関西大学における紛争の早期解決に向けて大きく貢献した。

会報の変遷

1978（昭和53）年発行の第50号で初めてカラーグラビアを掲載し、第53号からは表紙もカラー化されている。これに伴い、『会報』を内容にふさわしい誌名に変更してはどうかという、会員からの提案がきっかけとなり、新しい誌名を公募。1980（昭和55）年発行の第55号から『葦』と改題した。2005（平成17）年発行の第130号からは、A4判の全面カラー印刷となった。

また、大学が創立120周年を迎えた2006（平成18）年発行の第135号を「関西大学創立120周年記念号」として特集を組んだ。

現在、『葦』は年3回発行し、キャンパスの最新情報や話題を家庭に届ける、文字どおり「かけ橋」の役割を果たしている。

新入生父母・保護者向けガイドブックの発刊・充実

1971（昭和46）年6月1日、専任の先生方のプロフィルをまとめて紹介する冊子が刊行され、すべての会員父母・保護者に届けられた。この冊子の内容は、先生の肖像写真、経歴、専攻、研究活動の個人情報を好意的な視点でまとめたもので、学生・父母・保護者・教員の相互理解を促すうえで有用され、大きな反響を呼んだ。これが『先生の横顔』のはじめである。

父母・保護者向け大学ガイドの変遷

この企画に加えて、父母・保護者のために大学生活の指針を細かく網羅し、家庭において大学と大学生活のすべてがわかる手引書として1972（昭和47）年9月30日に創刊されたのが、『関西大学父兄のためのガイド』である。

『関西大学ガイド』は常に改善の工夫が凝らされ、時代の変化に応じてカラーグラビアを新設したり、関西大学の歴史にふれたり、大学におけるさまざまな手続きのインデックスとしての機能も盛り込まれていった。判型は当初のA5判縦組みからB5判横組みへと変わり、1975（昭和50）年からは書名を『関西大学』、さらに『関西大学ガイド』に変更した。

2013（平成25）年、『関西大学ガイド』の誌面を一新。「先生の横顔」を割愛し、新たに「学園散策」と「関大四季」を掲載することとなった。

さらに、2016（平成28）年には全ページカラーとし、タイトルも『みちしるべ―関西大学の4カ年―』と変更、2017（平成29）年には全面リニューアルとともに休刊となっていた「先生の横顔」を復活させた。

このようなガイドブックの発行および新入生の父母・保護者への配付は、本教育後援会が全国の大学に先駆けてのもので、これだけの豊富な内容のものは現在でも例を見ないといえる。

大学映画で歴史を後世に伝える

その時々の学校の規模や状況、環境を映像に収め、後世への記録に役立てようと、教育後援会は数多くの大学記録映画を製作してきた。1951（昭和26）年の「大阪の葦」をはじめとして、「関西大学」「青春の群像」「飛鳥とともに」「青春の環」など、ドキュメンタリー映画のほか、1967（昭和42）年からは、「教育後援会総会・学部別教育懇談会」の記録映画を毎年製作してきている。

映画「飛鳥とともに」と「夢、未来を育む－関西大学－」（画像の一部）

2014（平成26）年には、飛鳥文化研究所創設・飛鳥史学文学講座開講40周年を記念して、1978（昭和53）年に製作した「飛鳥とともに」を新たに全面リニューアルし、すべての父母・保護者ならびに教職員に配付した。

なお、2013（平成25）年10月から映画をホームページで公開するようになった。構成は2014（平成26）年から大きく変わり、関西大学の歴史をはじめ、教育・研究への取り組み、各キャンパス紹介、学生たちの活躍、教育後援会の活動などの様子を36分にまとめた。

この他、大学と共同での映画も製作。1987（昭和62）年には、関西大学創立100周年記念事業の一環として、「関西大学風雪の歴史」「燃ゆる関西大学」の2本を製作した。

新入生や卒業生などへ記念品を贈呈

教育後援会の事業のひとつに、新入生や卒業生などに贈る記念品の製作がある。

1969（昭和44）年、教育後援会で関西大学の5曲の学園歌（学歌・逍遥歌・応援歌・学生歌・新学生歌）を録音したレコード「われら関大生」が製作され、新入生全員に贈呈した。その後レコードは1983（昭和58）年にカセットテープとなり、1993（平成5）年からはキャンパス風景などを撮り込んだCDエキストラ版に改められ、新入生がキャンパスライフに早くなじめるよう内容の充実に努めてきた。

現在は、キャンパス風景絵葉書に加え、シールと一筆箋を新入生全員に贈っている。シールは校章をはじめとする大学ロゴマークを転写できるタイプで、一筆箋は、2013（平成25）年4月発行の会報『葦』第154号から裏表紙を飾る村居正之画伯のキャンパス風景画をモチーフにしたものである。2011（平成23）年からは、新入生の父母・保護者に「わが子の4カ年の日記」を贈呈している。

卒業生への記念品としては、後援会が結成されて間もないころは、特製の「文鎮」を贈っていた。文鎮は学部章を埋め込める造りとなっており、長く卒業生に愛用されていた。記念品は時代とともに、文鎮からネクタイピン、カフスボタン、バックル、レリーフ、ルーペ、卒業証書入れ桐箱などへと移り変わっていった。

1971（昭和46）年度からは、卒業証書の様式がB4判に改められたのを機に、学長の揮毫による題字を箔押しした布貼り製の卒業証書ファイルを卒業生全員に贈呈。1985（昭和60）年度からはさらに、関西大学の校章をデザインした特製の栞（ブックマーク）を添えていたが、2013（平成25）年度からは、パスケースへと変更した。

その他、1968（昭和43）年頃には、光風会所属の洋画家・松浦莫章画伯に依頼して大学の風景画を描いてもらい、それを原画として絵葉書を作成しようとする企画がもちあがり、当時の総会や地方教育懇談会などの催しの際の記念品として配付され好評を得た。

歴代の入学生および卒業生への記念品

「開かれた大学構想」をいち早く実践した飛鳥史学文学講座

関西大学による高松塚古墳の壁画発見が大きな動機となり、奈良県明日香村にセミナーハウスとして、飛鳥文化研究所・植田記念館が建設された。

教育後援会では、このセミナーハウス建設を機に、当時の横田健一教授、網干善教教授と森本靖一郎幹事長が中心となり「地元で飛鳥の歴史と文学をテーマにした講座を開きたい」という企画がもちあがった。折しも明日香村が新しく公民館を建設し、村の文化活動の拠点づくりを目指していたこともあり、そこを主会場として大学（飛鳥文化研究所・植田記念館）と明日香村が共催して「飛鳥史学文学講座」が開講されることになった。

1975（昭和50）年4月29日がその第1講の日であった。いまでこそ、多くの大学が公開講座を開いているが、当時としては稀有の、よき先例となった。

以来、関西大学の教授を中心とする充実した講師陣と内容豊かなテーマを取り上げて毎年連続して開かれる講座は人気の市民講座として定着した。

飛鳥史学文学講座 ― やまと・あすか・まほろば塾 ―

1976（昭和51）年5月、この講座の内容を編集した『講座　飛鳥を考えるⅠ』を出版、続く1977（昭和52）、1978（昭和53）年には続編としてⅡ、Ⅲを上梓した。この『講座　飛鳥を考える』は、教育後援会として初めての出版事業であった。また、飛鳥史学文学講座を後援する関西大学千寿会も、シリーズ『飛鳥の歴史と文学』を発刊。1984（昭和59）年12月刊行の第4集まで続いた。

2010（平成22）年度、講座開講から35年を経て、地元明日香村だけでなく、奈良、大阪、京都、神戸、和歌山、さらには東京、金沢、名古屋、広島や九州からも多くの人が聴講に訪れ、聴講者が9万人を超えたのを機に、大嶌征次幹事長と髙橋隆博教授が中心となって「やまと・あすか・まほろば塾」として、内容のさらなる充実・発展を図った。

40年以上にわたって公開講座を継続して行っている例は少なく、開講42年を経た2016（平成28）年度には聴講者が10万人を超えた。

現在、8月と2月を除いて毎月1回、第2日曜日を基本に午後から飛鳥の古代史に限らず、史学、考古学をはじめ、各分野の研究成果をわかりやすく講話している。

2018（平成30）年6月には、第500講を迎える予定で、まさに関西大学の「開かれた大学構想」の理念をいち早く実践した講座であるといえる。

Webサイトでリアル情報を発信

教育後援会は、関西大学に関するさまざまな情報をウェブサイトやfacebookページを通して発信している。

教育後援会ホームページ

パソコンだけでなく、モバイル端末からのアクセスも可能で、その内容は、総会・学部別教育懇談会、地方教育懇談会、就職説明懇談会、飛鳥史学文学講座など本会が催す行事の日時・場所はもちろんのこと、会則や歴史、セミナーハウスなど後援会に関するあらゆることを網羅し、多岐にわたる。

関西大学のホームページともリンクしており、キャンパスライフに関するさまざまな事柄、学生生活や奨学金、学生寮や留学、就職、資格取得など知りたい情報をリアルタイムで検索することができる。

なお、前述したように2013（平成25）年10月から、大学紹介映画「夢、未来を育む―関西大学―」も公開している。

父母・保護者が利用できるインフォメーションシステム（保護者ポータル）もあり、各種イベントへの出席届の返信や、所属学部ごとに子女の成績・履修情報を閲覧することもできる。

被災地学生への支援を中心とした活動

阪神・淡路大震災

1995（平成7）年1月17日、震度7の激震が兵庫県南部を襲った。在学生も含めた多くの本学関係者が被災し、長い期間、水やガスの出ない途方もない窮境を余儀なくされた。

大学では、被災地区の学生に対して、別途試験日を振り替えて行うことや、被害に遭った学生宛にその旨の通知文を郵送し、返信用葉書を同封して被害状況の把握に努めた。

その他にも、通学が困難になった学生や住居が倒壊した学生に対して高槻キャンパスのセミナーハウス高岳館への宿泊、大学近隣の下宿の斡旋、学費等の減免措置、義援金募集の呼びかけなどにも対応し、教育後援会もこれらの大学側の対応に全面的に協力、資金面においても支援した。

また、教職員の状況については、大学の人事課を中心に学部事務室を通して把握に努めた。救援を要する必要度が高い人々に対しては、救援隊を派遣することが決まった。救援隊は3人1組で14チームを編成し、救援物資と見舞金を持参して、1月21日に大学を出発した。阪急西宮北口駅までは電車で行き、あとは自宅付近の略図と被災者の顔写真を頼りに徒歩で進み、遠くまで出向いたグループは、1日10時間も歩いたという。

東日本大震災

2011（平成23）年3月11日、東北地方太平洋沖地震が起きた。地震による津波、さらに福島第一原発事故により被害は拡大する一方であった。関西大学の在学生・新入生も被災した。

この東日本大震災による被災学生のために、大学は授業料等の減免措置をとるとともに、「関西大学災害特別義援金」の募集を、関西大学理事長および学長、評議会議長、校友会会長、教育後援会会長、千寿会会長の連名で呼びかけた。大学の理事・監事・評議員・顧問・職員、校友会代議員、教育後援会および千寿会役員を対象としたもので、募集期間は当初の予定よりも延長され2015（平成27）年度まで行われた。

教育後援会では、学部学生の父母・保護者に対して4月上旬に教育後援会総会の案内状に「義援金呼びかけ文書」を同封するとともに、会報『葦』第148号に協力のお願い記事を掲載した。

また、会報『葦』第149号で、特集「東日本大震災」を組み、被災した本会宮城県支部役員の声やボランティア活動に取り組む学生の姿を伝え、支援の輪を広げていった。

なお、被災した本会会員に対しては、入会金ならびに会費の減免を行った。

熊本地震

2016（平成28）年4月、熊本で大地震が発生。14日夜の前震、16日未明の本震と2度にわたり最大震度7クラスの揺れが襲った。

教育後援会では、震度5弱以上の地域に在住の会員全員にお見舞いの手紙を送り、被災された父母・保護者からも手紙をいただいた。同年5月15日に開催された教育後援会総会の冒頭の挨拶では、芋縄隆史会長がその手紙を紹介すると、目頭を押さえる姿が多く見られた。

メッセージを募集する取り組みをあわせて実施。義援金は80万5,773円に上り、大学やボランティアセンターが実施した募金活動と合わせて日本赤十字社に送金、多くの温かいメッセージも寄せられた。

ボランティアセンター学生スタッフと学生有志、教育後援会執行部役員で行った義援金募集活動（2016年）

また、2004（平成16）年に起こった新潟県中越地震ならびに台風23号により被災された方がたへの救援活動の一環として義援金を送るとともに、新潟県および兵庫県豊岡市に在住の父母・保護者に対して、お見舞いの文書を発信している。

その他にも、教育後援会では、自然災害で被災された地域に在住の父母・保護者に対し、その都度、支援措置をとってきている。

大学ランキングで不動の1位

さまざまな視点から大学情報が提供されている『大学ランキング』。朝日新聞出版では、2009年から保護者会への年間参加者数を集計した「保護者会ランキング」の掲載を始めた。

この中の「保護者会への参加者数ランキング」で、関西大学教育後援会は毎回、不動の1位となっている。

これは、千里山キャンパスで開催する総会・学部別教育懇談会をはじめ、就職説明懇談会等キャリア関連行事、全国主要都市における地方教育懇談会といった、在学生の父母・保護者にとって関心の深い事業・行事を継続的に展開してきた結果であり、関西大学が、在学生のみならず、父母・保護者にとっても「面倒見のよい大学である」という高評価に繋がっている証左といえる。

飛鳥文化研究所・植田記念館

飛鳥文化研究所・植田記念館の開設

飛鳥文化研究所は、高松塚古墳における極彩色壁画の発見がそもそもの起こりとなっている。高松塚古墳の発掘は奈良県立橿原考古学研究所によって進められたが、現場での発掘にあたったのが網干善教助教授の率いる関西大学チームであった。

当時、教育後援会会長を務めていた植田正路氏は、拡子夫人とともに、親交のあった教育後援会の森本靖一郎幹事長夫妻と須磨の舞子ホテルで会食を楽しんでいた際、この業績に感銘を受けるとともに、黙々と発掘を続ける網干先生と学生たちの姿を見て感動を覚えた。農家に頼み込んで宿泊させてもらい発掘したという苦労話を聞くにおよんで、明日香の地に研究施設があれば研究もはかどるであろうと思った。そこで、森本幹事長を通して、今後大学において施設の建設を進める計画があるのであれば資金を援助して協力したい旨を伝え、私財6,000万円を寄付。1975（昭和50）年4月3日、セミナーハウス「関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館」が竣工した。敷地面積868.32㎡、木造瓦葺き2階建て、延べ300㎡、外観は周囲の環境にあうよう工夫し約40人が宿泊できる和風建築である。

理事会では、この学外セミナーハウスに「植田記念館」の名を冠して厚志に応えた。

飛鳥文化研究所・植田記念館（本館）

教育振興植田基金の設置

植田正路氏は、1976（昭和51）年3月5日、預金、有価証券、土地など、7億数千万円相当額に上る高額寄付を申し出られた。

関西大学では、この寄付をもとに「教育振興植田基金」を設置し、毎年この基金から生じる果実を、飛鳥文化研究所・植田記念館の拡充・整備、植田文庫の設置、教職員の学術調査研究の助成などの事業にあてることとした。

この基金の管理のため、「教育振興植田基金運営委員会」が設けられ、教育後援会がその任にあたっている。

増改築と新館の建設

飛鳥文化研究所・植田記念館は当初余裕をもって設計されたが、利用者が増えるにつれ手狭となった。そのため「教育振興植田基金」により増改築に着手し、1977（昭和52）年4月28日に完成した。敷地1,155.1㎡、建物延べ面積487㎡となり、60人の宿泊が可能となった。

その後も使用頻度は上昇の一途をたどったため、1987（昭和62）年4月6日、研究所に隣接して新館が竣工した。山の斜面を利用した鉄筋コンクリート造り、地上2階（一部地下1階）の1～8号館からなる延べ2,563.66㎡、山深い里の景観に溶け込んだ風格のある造りである。建物の周囲には桜や桃が植樹され、玄関横には久井忠雄理事長が叙勲記念に寄贈された約1,000株の各種樹木と景石が配され、来館者の心をなごませている。

このように明日香の地と景観に調和した新館は、1991（平成3）年1月8日に「第4回奈良県景観調和デザイン賞」会長賞を受賞した。

飛鳥文化研究所・植田記念館（新館）

セミナーハウスの利用申し込みを本会に一元化

関西大学には、「飛鳥文化研究所・植田記念館」をはじめ、教育後援会が建設・寄贈した「白馬栂池高原ロッジ」「六甲山荘」、大学が100周年記念事業として建設した「高岳館」のほか、「彦根荘」など学生の課外授業・課外活動および教職員の福利厚生施設である各種セミナーハウスがある。これらの利用申し込みを2007（平成19）年から、教育後援会が大学の委託により行っている。全セミナーハウスの利用申し込みを本会が一元管理することにより、利用したい施設が満員の場合、他の施設の予約状況もすぐにわかり利便性が向上した。

施設・設備の拡充・整備

2008（平成20）年4月、飛鳥文化研究所・植田記念館の中庭が、森本靖一郎理事長からの寄贈による樹木と新たな造園で整備された。ここでは6月ごろに、近くを流れる飛鳥川で、ホタルの群れが飛び交う風物詩が楽しむことができる。

植樹された中庭

また、愛書家で知られる森本理事長は、退任後の2009（平成21）年に、蔵書類約1,500点を飛鳥文化研究所・植田記念館に寄贈された。同研究所図書室では、書架に「森本靖一郎文庫」として配架した。

目録も整備され、閲覧に供されている。

飛鳥文化研究所図書室の森本靖一郎文庫

大学の周年記念事業への協力

100周年、120周年、130周年記念事業への協力

関西大学では、1986（昭和61）年に創立100周年、2006（平成18）年に創立120周年、2016（平成28）年に創立130周年の佳節を迎え、それぞれの節目に数々の記念事業を推進してきた。

教育後援会も全面的に賛同し、組織を挙げて募金活動を行った。創立100周年のときは、教育後援会関係の寄付金額は、最終的に11億3,169万1,988円（合計件数1万3,807件）に上った。これにより数々の記念事業が企画され大学環境の充実に貢献した。

創立120周年でもさまざまな計画が立てられ、教育後援会では「我が子の母校は我が母校」のスローガンのもと、全力を挙げて大学の募金活動を支援。役員、事務局が一体となって募金推進の活動を進めた。

関西大学創立100周年記念式典（大阪城ホール）

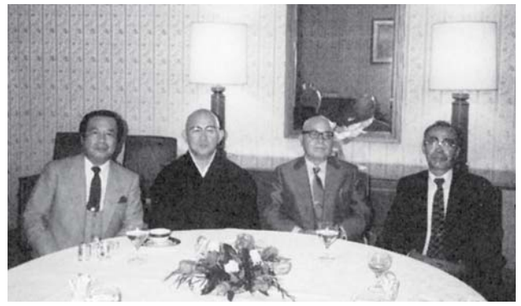
その募金が寄与したものの一つに、国際競技規格の通年型アイススケートリンク「アイスアリーナ」建設がある。校友会、教育後援会、千寿会、アイススケート部やアイスホッケー部OBらが協力して2006（平成18）年7月に完成。このアリーナを拠点として、五輪選手の高橋大輔、織田信成、町田樹らが大きく羽ばたいていった。

創立130周年では、千里山キャンパスの新アクセス・エリア内にあるエスカレーター建設資金3億円を大学に寄付した。関西大学の新たな玄関口として、駅とキャンパス間におけるスムーズなアクセスの実現に大きく貢献した。

教育後援会のこうした協力に対して、大学は感謝状を贈呈して感謝の意を表した。

「日・印共同学術調査」を全面的に支援

関西大学創立100周年記念事業では、当初計画になかった「日・印共同学術調査」の費用を教育後援会が拠出し、実施された。これは、ロイヤルホテルにおける久井忠雄理事長、網干善教教授、森本靖一郎幹事長、壷坂寺の常盤勝憲師の4氏の協議がきっかけであった。



事前協議（左から、森本靖一郎幹事長、常盤勝憲師、久井忠雄理事長、網干善教教授）

調査・発掘は、1986（昭和61）年から1988（昭和63）年までの3次にわたり、北インドのサヘートという「祇園精舎」の跡ではないかと伝えられている遺跡で行われた。現地の発掘指揮は、網干善教教授がその任にあたり、教育後援会と千寿会も「日・印共同学術調査振興会」を結成して、側面から事業を支え、その経費1億3,000万円を大学に寄付した。

調査の結果、「祇園精舎」跡であることが確認され、学会はもとより世間の注目を浴び、記念事業として成果を収めた。

祇園精舎跡と確認されたサヘート遺跡

その他、教育後援会独自の記念企画として、高松塚壁画古墳発掘の際、当時文学部助教授であった愛弟子の網干善教先生らの指導に当たられた末永雅雄名誉教授の執筆による『常歩無限 関西大学考古学廿年の歩み』の刊行がある。同書は、森本靖一郎幹事長の依頼の下、執筆されたものである。

文化事業への支援

教育後援会の事業の一つに文化事業への支援がある。その一環として、前述の「日・印共同学術調査」のほか、「関西大学下筌・松原ダム総合学術調査団」などへも支援を行ってきた。

関西大学下筌・松原ダム総合学術調査は、「蜂の巣城紛争」といわれる法廷闘争を客観的な学問的立場から調査研究・論評を目的とするものであった。

1953（昭和28）年6月25日、集中豪雨によって筑後川が氾濫、流域の被災者総数375,000人という大災害となった。国は治水対策として、多目的ダムの下筌・松原ダムを建設することとした。この計画の妥当性について地元では疑義が生じ、大規模なダム建設反対闘争へと展開。下筌ダム建設予定地に砦「蜂の巣城」を築いて抵抗したことから、「蜂の巣城紛争」と呼ばれるようになった。

関西大学下筌・松原ダム総合学術調査は、反対運動のリーダー室原知幸氏からの桜田誉法学部教授への依頼によるものである。調査対象は広範な学問領域にわたることから、桜田教授は各学部に協力を要請、40人に及ぶ教授・助教授・講師の方々の協力を得ることができた。個人的・自発的な参加であったため費用は自己負担が基盤であった。その状況を知った森本靖一郎幹事長は、千寿会からネーム入り鉛筆などを寄贈。教育後援会有志をはじめ関係初志の寄付を得て、第1回調査が実施された。その後も、多数の協力者による寄付、関係市町村や地元企業の協力・支援のおかげで調査は継続できていた。

教育後援会も人的・資金的に支援を行い、10年に及んだ調査研究の最終段階では、第8次現地調査および団員全員による学談会記録の作成費用を提供した。後に、桜田教授は「わが学術調査団の研究活動の背後にはそのような教育後援会のご協力があって、これが成功に導かれたのであるといえるのです」と述懐している（関西大学図書館報『籍苑』第20号＜1985（昭和60）年4月28日発行＞）。

教育後援会創立50周年記念事業

白馬栂池高原ロッジの建設・寄贈

大学後援会組織のさきがけとして、たしかな歩みを続けてきた関西大学教育後援会は、1997（平成9）年6月10日に記念すべき創立50周年を迎えた。そこで、この慶節にふさわしい記念事業が計画された。その一つが、「関西大学白馬栂池高原ロッジ」の建設と寄贈である。関西大学では、長野県北安曇郡小谷村の栂池高原スキー場近辺に用地を確保していた。この地に教育後援会の手で新しい施設を建設しようとの気運が起こり、1996（平成8）年3月10日に開催された委員会において全会一致で可決。関西大学に指定寄付の申し込みを行い、3月29日開催の理事会で承認された。

同年に着工し、教育後援会が創立50周年を迎えた1997（平成9）年6月17日に竣工。同日に大学に贈呈するセレモニーとして、竣工記念祝賀会が挙行された。

なお、白馬栂池高原ロッジの竣工記念として、千寿会から一刀彫りの巨大な木製フクロウがロッジに寄贈された。

白馬栂池高原ロッジ

記念講演会「古代史のロマン」と記念祝賀会の開催

他の記念事業としては、「創立50周年記念講演会」と「創立50周年記念祝賀会」があり、ともに教育後援会の創立記念日にあたる1997（平成9）年6月10日に行われた。

記念講演会は、当時、初代関西大学博物館長であった網干善教文学部教授による「古代史のロマン」で、高松塚古墳の発掘から四半世紀に及ぶ研究の成果を中心に話された。会場である関西大学会館4階の大集会室には300人を超える聴講者が集まり、悠久の歴史の一端と考古学の奥深いロマンにふれるまたとない機会となった。

講演終了後に100周年記念会館ホールで記念祝賀会が行われ、大西昭男理事長と石川啓学長から、教育後援会の米田幹郎会長に感謝状が贈呈された。続いて、教育後援会では、創立50周年を機に歴代会長各氏に感謝状を贈呈した。最後に、森本靖一郎前幹事長にも長文の感謝状が贈られ、長年にわたる幹事長在職中の労苦をねぎらうとともに、多大な貢献を顕彰した。

創立50周年記念祝賀会

『関西大学教育後援会五十年史』の刊行

創立50周年に向けて年史編纂作業を進めていた教育後援会は、2000（平成12）年3月末、A5判、666ページの『関西大学教育後援会五十年史』を刊行した。

本文では、「大学と家族の心のかけ橋」を基調に、創設期の苦労から、発展、飛躍、充実期を経て、今日までの経過を紹介。その他、各種事業の記録写真を中心としたカラーグラビア、資料ページには年表に加え、行事ごとの参加者数の経年数値データも収録した。

『関西大学教育後援会五十年史』

教育後援会創立60周年記念事業

アイスアリーナで記念式典・アイスショーを開催

教育後援会は、2007（平成19）年に創立60周年を迎えた。60周年にふさわしい事業として、「アイスアリーナ」で記念式典、アイスショーを開催した。

式典では、関西大学から本会に感謝状が贈られた。

感謝状贈呈

午後からは、リンクを舞台としたショーが開かれ、トップスケーターと指導スタッフの紹介のあと、来賓の橋本聖子日本スケート連盟会長から祝福と激励の言葉をいただいた。

続いて、ちびっ子スケーターによる団体演技、本学アイススケート部トップスケーターによるエキシビション、フルートとピアノデュオによるコンサートなどが行われた。

トップスケーターによるアイスショー

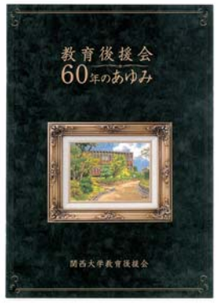
メインエキシビションには織田信成氏が登場し、世界レベルのスケーティングを披露。最後は、トップスケーター全員によるグランドフィナーレで幕を閉じた。

白馬栂池高原ロッジ別館がオープン

教育後援会が創立50周年記念事業として寄贈した「白馬栂池高原ロッジ」は好評を博し、利用者が増加、手狭となっていた。そのため関西大学は拡充・整備計画を策定。それを受けて教育後援会は拡充・整備資金を寄贈し、別館が2007（平成19）年12月にオープンした。同時に、教育後援会60周年記念事業として拡充整備の一環で進められていた隣接のテニスコートも完成。スキーシーズン以外での利用の幅が広がった。

『教育後援会60年のあゆみ』を刊行

60周年記念事業の一環として『教育後援会60年のあゆみ』を刊行し、「アイスアリーナ」で開催した創立60周年記念式典参加者へ記念品として配付した。



『教育後援会60年のあゆみ』

A4判、24ページ、オールカラーの小冊子として、関係者の挨拶・祝辞のほか、本会の活動の実績や歴史を写真・文・略年譜でコンパクトにまとめたものである。

他に例を見ない千寿会の創設

息の長い大学支援

関西大学千寿会は、教育後援会の役員OB・現役の方々を会員として、その親交を厚くし、関西大学の発展・向上に寄与することを目的として1955（昭和30）年12月9日に誕生。関西大学が千里山で寿しく発展することを祈念して、「関大千寿会」と名づけられた。

1968（昭和43）年、さらに充実・発展を期すべく、名称を「関西大学千寿会」と改称。2005（平成17）年には創立50周年の佳節を迎え、会員数は約600人となっていた。千寿会は単なる親睦団体にとどまることなく、「関西大学のために」連帯し、永続的に大学の教育研究活動の充実、発展を支援。「『子どもの母校は我が母校』（森本靖一郎名誉会長が考案したキャッチフレーズで、教育後援会も含めた千寿会創設のバックボーンとなっている）、この言葉を一番深くご理解いただき、かつ身をもって教育支援という形で体現していただいているのが千寿会であります」と、森本靖一郎名誉会長は千寿会の会合で繰り返し感謝の言葉を述べられていることからも、千寿会の果たしてきた役割の大きさがうかがえる。

大学の周年記念事業に多大な貢献

千寿会の活動で忘れてならないのが、関西大学創立80周年、90周年、100周年、120周年、130周年の記念事業や募金活動に積極的協力を惜しまず、多大な貢献をしてきたことである。

関西大学は創立100周年を迎えた1986（昭和61）年11月4日、感謝状を贈り、千寿会の惜しみない尽力に対し感謝の意を表した。その後も、大学から数多くの感謝状が贈られている。

創立50周年記念祝賀会を開催

2005（平成17）年11月27日、関西大学千寿会の50周年記念祝賀会が催された。祝賀会では、理事長と学長の連名による千寿会会長への感謝状が、森本靖一郎理事長から中西康男会長に贈られた。続いて、参席された歴代会長と事務局長へ感謝状が贈呈された。

千寿会に贈られた感謝状

その後、中西会長から森本理事長に対して感謝状が贈られた。森本理事長は千寿会の創立にも携わり、長年にわたって会の充実と発展に寄与してこられた。その多大な貢献に謝意を表してのものであった。なお中西会長は感謝状と合わせ、大学創立120周年記念事業募金に協賛して1,000万円を寄付する旨の目録を手交した。

千寿会50周年記念祝賀会

祝賀会はその後、くす玉開きのあと作詞作曲家の西村賢三氏による歌と演奏が行われ、千寿会名誉顧問でもある網干善教名誉教授が「千寿会50年における古代史の秘話」と題した講演を行って締めくくられた。

なお千寿会では50周年を記念し、記念誌『我が子の母校は我が母校 ― 千寿会50年のあゆみ ― 』を刊行した。

創立60周年記念式典を開催

2015（平成27）年に関西大学千寿会は創立60周年を迎え、翌年1月16日に60周年記念式典が催された。式典は恒例の新年交礼会とあわせてリーガロイヤルホテルで行われ、240人の参加者で賑わった。

式典では、千寿会の多年にわたる支援に対して、関西大学から感謝状の贈呈が行われた。

森本靖一郎名誉会長と小坂圭一会長が池内啓三理事長から、歴代会長を代表した水本隆平氏が楠見晴重学長からそれぞれ感謝状を授与された。また当日出席した歴代会長、歴代幹事長全員に対して記念品が贈呈され、これに対して森本名誉会長が謝辞を述べた。

粛々とした雰囲気のなかにも熱気の込められた式典はその後、くす玉開きへと移り、大阪オペラ協会代表の布埜秀昉氏、前大阪音楽大学教授の布埜洋子氏、ピアノ奏者の尾崎克典氏らによる『新春を寿ぐ調べ』で締めくくられた。

なお千寿会では50周年と同様に、創立60周年を記念して『わが子の母校は我が母校 ― 千寿会60年のあゆみ ― 』を刊行。当日の参加者全員に配付された。

記念品を授与された歴代会長と歴代幹事長